

戦後日本の学校体育におけるボール運動の取り扱いに関する研究

張 曉博 長見 真

キーワード：「学校体育」「ボール運動」

A study on handling the ball games in physical education in Japan

Zhang Xiaobo Nagami Makoto

Abstract

The purpose of this study is to clarify the transition of handling the ball games in physical education after the World War II in Japan.

In the period of "New physical education" (1945-1957), the ball games which could be learn with "group learning" or had the character of "recreation" had be handled. In the period of "Physical fitness" (1958-1976), the ball games which needed the high amount of exercise had be handled. In the period of "Tanoshii-Taiiku" (1977-), various ball games have been handled and pupils have selected these on their own wills in order to develop qualities and abilities to participate in enjoyable physical activity to pupils.

Key word : Physical education, Ball games

1. 問題の所在と研究の目的

平成20年8月に改訂された小学校学習指導要領では、ボール運動種目の取り扱いが大きく変わり、「ゴール型」、「ネット型」、「ベースボール型」という型によって内容が示された。戦後から今までの日本の学校における体育科の学習指導要領に示されているボール運動種目を見てみると、「バスケットボール」と「サッカー」はずっと取り扱われている。しかし、小学校においては「ソフトバレーボール」は平成10年の改訂で、「タグラグビー」「プレルボール」「ティーボール」は平成20年の改訂で導入されている。また、「ハンドボール」「ソフトボール」「ポートボール」については取り扱うことができない学習指導要領とそうでない学習指導要領がみられる。このように学習指導要領は今までに7回改訂されているが、各改訂で取り扱うボール運動種目は必ずしも同じではない。

そこで、本研究は、戦後日本の学校体育におけるボール運動の取り扱いを明らかにすることを目的とする。

研究の手順としては、まず、戦後日本の学習指導要領体育の目標を3つに時期区分して整理する。次に、ボール運動の取り扱い方について、デブラーによる球技の分類論を手がかりにして3つの時期ごとに整理し、その傾向を明らかにする。そして、それぞれの時期におけるボール運動の取り扱い方について考察を行う。

2. 学習指導要領から見た体育の目標の変遷

戦後から今まで学校における学習指導要領は、昭和22年で初めて編集、刊行されて以来、昭和28年、33年、43年、52年、平成元年、10年、平成20年7回改訂されてきた。

戦後日本の体育の目標は3つに時期区分

される(高橋ほか, 2002. P.40)。それは、「新体育」「生活体育」の時期(昭和22年～昭和32年)、「体力づくり」の時期(昭和33年～昭和51年)、「楽しい体育」の時期(昭和52年～今)である。

「新体育」「生活体育」の時期の要綱、要領は、教育の一般目標である民主的人間形成を可能にするために、体育科でも民主的な生活態度を育成する社会性の発達目標(社会的目標)が中心を占めた。また、アメリカの経験主義教育の影響から、子どもの日常の運動生活と体育科の関連を強調し、レクリエーションを日常生活に取り入れることをめざす生活体育が重視された。

次に、「体力づくり」の時期の目標では、先の時期の生活中心の経験主義教育のもとでは、基礎学力の低下が問題とされるようになった。ここから、科学の体系を重視する系統主義教育への転換が行われたが、体育科では、昭和33年要領で教科の系統を運動技術ととらえ、基礎的運動能力や運動技能の向上をめざす技能的目標が強調されるようになった。

そして、「楽しい体育」の時期の目標では、昭和52年要領は、技能的目標、体力的目標、社会的目標を従来同様に重視しながらも、運動への愛好的態度の育成を重点目標に位置づけた。この傾向は、平成元年、平成10年、平成20年要領にも踏襲されるが、平成元年要領からは技能的目標、体力的目標、社会的目標は、生涯スポーツの能力と態度を育成するという上位目標をより具体化するために、「運動の学び方」が重視されるとともに、「心と体を一体としてとらえる」ことが上位目標に挙げられた。

3. 体育におけるボール運動の取り扱い方
について

デブラーの分類視点(デブラー, 1985)か

ら見た学習指導要領における「ボール運動」
の取り扱いは表1、表2及び表3のように
示される。

表1 小学校における「ボール運動種目」の変遷

年		昭22	昭24	昭28	昭33	昭43	昭52	平元	平10	平20			
I	ゴール型の球技種目	身体接触を伴うもの	ハンドボール	×	×	×	×	×	×	△	△		
			タグラグビー	×	×	×	×	×	×	×	△		
			サッカー	×	×	×	○	○	○	○	○		
			フットボール	○	○	○	×	×	×	×	×	×	
			簡易サッカー	×	×	○	×	×	×	×	×	×	
			キックボール	×	×	○	×	×	×	×	×	×	
			ラインサッカー	×	×	×	×	○	○	×	×	○	
			ミニサッカー	×	×	×	×	×	×	×	×	○	
			フラッグフットボール	×	×	×	×	×	×	×	×	○	
			対列フットボール	○	○	×	×	×	×	×	×	×	
	伴わないもの	バスケットボール	×	○	×	×	△	○	○	○	○		
		エンドボール	×	○	×	×	○	×	×	×	×		
		ポートボール	○	○	○	○	○	○	○	×	○		
II	サーブを伴う打ち返し型の球技種目	ダブルスのゲーム及びシングルのゲーム	バドミントン										
			テニス	×	×	×	×	×	×	×	×		
			卓球										
			チームゲーム	バレーボール	×	○	○	×	×	×	×	×	×
				ソフトバレーボール	×	×	×	×	×	×	×	○	○
ドッジボール	○	○		○	○	○	○	×	×	×			
ブレルボール	×	×		×	×	×	×	×	×	△			
III	打撃スローイング型の球技種目	ソフトボール	○	○	○	○	○	×	△	○	○		
		ティーボール	×	×	×	×	×	×	×	×	△		
		ワンアウトボール	○	○	×	×	×	×	×	×	×		
		フットベースボール	○	○	○	○	×	×	×	×	×		
		ハンドベースボール	×	○	○	○	○	×	○	×	×		
		キャッチボール	×	○	×	×	×	×	×	×	×		
		ロングベースボール	×	○	×	×	×	×	×	×	×		
IV	的当て型のトラリアル球技種目	ビリヤード、ゴルフ、カーリング、ボーリングなど	×	×	×	×	×	×	×	×			

表2 中学校における「ボール運動種目」の変遷

年			昭22	昭26	昭33	昭44	昭52	平元	平10	平20	
I	ゴール型の球技種目	身体接触を伴うもの	ハンドボール	○	○	×	■	◆	●	●	●
			ラグビー	②	×	×	×	×	×	×	×
			サッカー	②	②	②	②	●	●	●	●
			タッチフットボール	②	②	×	×	×	×	×	×
		身体接触を伴わないもの	バスケットボール	○	○	○	■	◆	●	●	●
II	返し型の球技種目	シングルス及びダブルスのゲーム	バドミントン	×	①	×	☆	※	●	●	●
			テニス	○	*	×	☆	※	●	●	●
			卓球	×	*	×	☆	※	●	●	●
			スピードボール	○	○	×	×	×	×	×	×
		チームゲーム	バレーボール	○	○	○	○	●	●	●	●
III	打撃、スローインの球技種目	ソフトボール	○	○	○	☆	※	●	●	●	
		ワンアウトボール	○	×	×	×	×	×	×	×	
		フットベースボール	①	×	×	×	×	×	×	×	
		軟式ベースボール	②	×	×	×	×	×	×	×	
		軟式野球	×	②	×	×	×	×	×	×	
IV	的当て型の球技種目	ビリヤード、ゴルフ、カーリング、ボウリングなど	×	×	×	×	×	×	×	×	

表3 高等学校における「ボール運動種目」の変遷

年			昭22	昭26	昭31	昭35	昭45	昭53	平元	平10	平20	
I	ゴール型の球技種目	身体接触を伴うもの	ハンドボール	○	○	○	■	●	★	●	●	●
			ラグビー	②	○	②	②	②	★	●	●	●
			サッカー	②	×	②	②	②	★	●	●	●
			タッチフットボール	②	②	×	×	×	×	×	×	×
		身体接触を伴わないもの	バスケットボール	○	○	○	■	●	★	●	●	●
II	返し型の球技種目	シングルス及びダブルスのゲーム	バドミントン	×	①	○	■	▲	△	●	●	●
			テニス	○	*	○	■	▲	△	●	●	●
			卓球	×	*	○	■	▲	△	●	●	●
			スピードボール	○	○	×	×	×	×	×	×	×
		チームゲーム	バレーボール	○	○	○	■	●	★	●	●	●
III	打撃、スローインの球技種目	ソフトボール	○	○	○	■	▲	×	●	●	●	
		フットベースボール	①	×	×	×	×	×	×	×	×	
		軟式野球	×	②	②	×	×	×	×	×	×	
		軟式ベースボール	②	×	×	×	×	×	×	×	×	
IV	的当て型の球技種目	ビリヤード、ゴルフ、カーリング、ボウリングなど	×	×	×	×	×	×	×	×	×	

注：1、○ 取り扱える
2、× 取り扱われていない
3、△ 地域や学校の実態に応じてボール運動種目を加えて指すことができる
4、● この中から2種目を選択
5、① 女子のみ
6、② 男子のみ
7、* (選択教材) 個人の特殊な要求に応ずるものや、特殊の施設に応ずるもの、あるいはまた教材評価における総合的価値がある程度低くとも、余暇活動としてよいものが大部分である。

8、■ この中から1種目を選択して履修する
9、☆ 第3学年においては、示された球技種目に代えて、ソフトボール、テニス、卓球、バドミントンを指導することができる。
10、※ 地域、学校の実態及び生徒の興味や関心に応じて、テニス、卓球、バドミントン又はソフトボールのうち一を加えて指導することができる。
11、◆ バスケットボールに代えてハンドボールを指導することができるものとする。

3.1 「新体育」「生活体育」の時期におけるボール運動の取り扱いについて

この時期におけるボール運動種目においては、「ゴール型の球技種目」の「身体接触を伴わないもの」はバスケットボール、「身体接触を伴うもの」はサッカー、「サーブを伴う打ち返し型の球技種目」の「チームゲーム」はバレーボール、「打撃、スローイング型の球技種目」はソフトボールが中心的な種目として取り扱われていた。「サーブを伴う打ち返し方の球技種目」の「シングルス及びダブルスのゲーム」(卓球、テニス、バドミントン)においては、中学校及び高等学校においては取り扱われていたが、小学校においては取り扱われていなかった。「的当て型のトライアル球技種目」は取り扱われていなかった。中学校及び高等学校における取り扱い方においては、男子と女子別に指導すること、取り扱うボール運動種目は選択ではなく、必ず取り扱うようになっていた。

この時期のボール運動の目標は、身体的目標、社会的目標、レクリエーション的目標が示されており、特に、小学校では社会的目標が強調されていた。ボール運動の学習では、好ましい人間関係を育てることが大切なねらいであり、このねらいを果すための学習では「グループ活動」が強調される。そうすると、チームボール運動種目は「グループ学習」を行いやすいので、バスケットボール(ポートボール)、サッカー、バレーボール及びソフトボールなどが取り扱われたと考えられる。逆に、個人的な「的当て型のトライアル球技種目」は取り扱われなかったと考えられる。

また、この時期のもう一つのは目標は「レクリエーション」であり、テニスはバドミントン、卓球、ソフトボールまたは軟式野球と並んでレクリエーション的種目に含まれている。このことより、中学校及び高等学校に

おける「サーブを伴う打ち返し型の球技種目」の「シングルス及びダブルスのゲーム」(卓球、テニス、バドミントン)は「レクリエーション」の目標のために取り扱われていたと考えられよう。小学校では中心な目標が社会的目標(グループ学習)であったので、取り扱われていなかったと考えられる。そして、この時期におけるボール運動種目の目標を身体的目標から分析すると、ボールゲームに必要な諸技能を伸ばすことが必要である。したがって、「技能を向上する」目標のために、ボール運動の学習は、技能のちがいでという点において、中学校、高等学校では、男子と女子別に指導することになったと考えられる。また、技能の向上レベルを図るために、学習者は同一種目の学習をすることになったと考えられる。

3.2 「体力づくり」の時期におけるボール運動の取り扱いについて

この時期におけるボール運動種目においては、小学校、中学校、高等学校として「ゴール型の球技種目」の「身体接触を伴うもの」(サッカーが中心)、「身体接触を伴わないもの」(バスケットボールが中心)及び「サーブを伴う打ち返し型の球技種目」の「チームゲーム」(バレーボール)が中心的な種目として取り扱われていた。「打撃、スローイング型の球技種目」(ソフトボール)においては小学校では取り扱われていたが、中学校及び高等学校は地域や学校の実態に応じてボール運動種目を加えて指導することができた。「サーブを伴う打ち返し型」の球技種目の「シングルス及びダブルスのゲーム」(卓球、テニス、バドミントン)は小学校では取り扱われていないが、中学校、高等学校においては地域や学校の実態に応じてボール運動種目を加えて指導することができた。「的当て型のトライアル球技種目」は取り扱われていなかった。中学校及び高等学校における取り扱い方においては、「男子と

女子別に指導すること」及び「取り扱うことができるボール運動種目の中から一や二を選択して指導することができる」とされた。この時期の体育の目標は、運動能力の育成や体力づくりが目標であった。したがって、強健な身体を育成し、体力の向上を図るの目標のために、運動量が高いボール運動種目を取り扱うことが必要となり、バスケットボール、サッカー及びバレーボールといった運動量が高いボール運動種目を取り扱われていたと考えられる。逆に、「打撃、スローイング型の球技種目」（ソフトボール）及び中学校、高等学校における「シングルス及びダブルスのゲーム」（卓球、テニス、バドミントン）、「的当て型のトライアル球技種目」においては、運動量が高くないボール運動種目であると考えられ、地域や学校の実態に応じてボール運動種目を加えて指導する、または、取り扱わなかったと考えられる。

また、この時期の目標である「技能の向上」を目指すために、中学校及び高等学校においては、「男子と女子別に指導すること」とした考えられる。さらに、体力の向上を、長い時間をかけて確かなものにするために、ボール運動種目を選択して指導することになったと考えられる。

3.3 「楽しい体育」の時期におけるボール運動の取り扱いについて

この時期におけるボール運動種目においては、「ゴール型の球技種目」の「身体接触を伴うもの」はサッカー、「身体接触を伴わないもの」はバスケットボールが中心的なボール運動種目として取り扱われていた。「サーブを伴う打ち返し型の球技種目」の「シングルス及びダブルスのゲーム」の卓球、テニス、バドミントンは、中学校及び高等学校では取り扱われていたが、小学校では取り扱われていなかった。「サーブを伴う打ち返し方の球技種目」の「チームゲーム」

はバレーボールが中心的なボール運動種目として取り扱われていた。「打撃、スローイング型の球技種目」はソフトボールは取り扱われていた。「的当て型のトライアル球技種目」は取り扱われていなかった。この時期におけるボール運動種目の取り扱いにおいては、全部のボール運動種目の中から二を選択して履修している。また、男女別に指導することがなくなった。さらに平成10年小学校学習指導要領では、ソフトバレーボール、プレルボール及びティーボールなど新たなボール運動種目が導入された。そして、平成20年の学習指導要領においては具体的なボール運動種目ではなく、「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」になった。「新体育」「生活体育」の時期及び「体力づくり」の時期と比べて、「楽しい体育」の時期では取り扱われるボール運動種目の数が増えた。

この時期における体育の目標においては、1970年代頃、生涯スポーツの理念が登場し、技能的目標、体力的目標、社会的目標を従来同様に重視しながらも、運動への愛好的態度の育成を重点目標に位置づけた。したがって、この時期の体育の目標は技能的目標、体力的目標、社会的目標も含んでいるので、「新体育」「生活体育」時期及び「体力づくり」時期と同様に、運動量が高いボール運動種目（サッカー、バスケットボールなど）及びチームゲーム（バレーボールなど）が取り扱われていると考えられよう。

また、この時期における一番重要な目標は「運動の愛好的態度を養うこと」であり、そのためには、多くのボール運動種目を取り扱う経験が重要であるので、特に小学校では「新体育」「生活体育」の時期及び「体力づくり」の時期と比べて、取り扱うことができるボール運動種目の数が増えたと考えられる。

さらに、「運動の愛好的態度を養う」ために、いろいろなボール運動種目の中から自

分の挑戦したいボール運動種目を選択して履修することが必要と考えられる。したがって、「楽しい体育」の時期における取り扱い方においては、「学校の実態及び生徒の興味や関心に応じて、テニス、卓球、バドミントン又はソフトボールのうち一を加えて指導することができる」及び「取り扱うことができるボール運動種目の中で二を選択して履修する」となったと考えられる。そして、ボール運動種目が増え、選択して履修することが保障されたので、「男子と女子別に指導する」の必要性がなくなったと考えられる。

しかし、どのようなボール運動種目を選択することが課題となる。そこで、平成20年の学習指導要領の改訂においては、「ボール運動」の内容は、従前「具体的なボール運動種目」から「ゴール型」、「ネット型」、「ベースボール型」になり、それぞれの型からボール運動種目を選択するようになったのである。「ネット型」については、小学校では取り扱う種目なかったもので、平成10年より、小学生でも実施可能なソフトバレーボールが導入されたのである。

以上のことをまとめると、「新体育」「生活体育」の時期においてはボール運動種目の目標は、社会的目標とレクリエーション的目標を重視したので、「グループ学習」及び「レクリエーション」の特性があるボール運動種目が取り扱われていた。また、「体力づくり」の時期は「強健な身体を育成し、体力の向上を図る」の目標のために、運動量が高いボール運動種目を取り扱うことが必要であった。そして、「楽しい体育」の時期においては、「運動への愛好的態度の育成」を重点目標に位置づけたので、いろいろなボール運動種目の中から自分の挑戦したいボール運動種目を選択して履修することになった結論づけることができる。

4. 今後の課題と展望

本研究の結果より、小学校では、「サーブを伴う打ち返し型の球技種目」の「シングルス及びダブルスのゲーム」(テニス、卓球、バドミントンなど)が、すべての校種で「的当て型のトライアル球技種目」(ゴルフなど)が取り扱われていないことが明らかとなり、これらのボール運動種目を導入する可能性を検討することが課題としてあげられる。ここでは、課題となるボール運動種目の中の卓球を例にして、小学校で導入する際の取り扱い方を考えてみたい。

平成10年の小学校学習指導要領では、ソフトバレーボールが導入された。ここで注目されることは、種目が「バレーボール」ではなく、「ソフトバレーボール」であるということである。つまり、小学生でも取り組むことができるやさしい運動であれば、導入することができるのである。この考え方を「卓球」にあてはめてみると、やさしい運動としての卓球種目として「ラージボール卓球」は、やさしい運動種目であり、それは小学校においてもその面白さを味わうことができるものであり、具体的な授業づくりを検討する可能性があると考えられよう。

文献

- デブラー, H: 稲垣安二・上平雅史監訳 (1985) 球技運動学. 不味堂: 東京.
- グリフィン, L・ミッチェル, S・オスリン, J: 高橋健夫・岡出美則監訳 (1999) ボール運動の指導プログラム—楽しい戦術学習の進め方. 大修館書店: 東京.
- 学習指導要領データベース <http://www.nier.go.jp/guideline/>
- 林修・後藤幸弘 (1997) ボールゲーム学習における教材配列に関する事例的検討—小学校中学年期に配当する過渡的相乱型ゲームを求めて—. スポーツ教育学研究, 17-2: 105-116.

- 出原泰明 (1997) 体育の授業方法論. 大修館書店：東京.
- 文部科学省 (2010) 学校体育実技指導資料 第8集 ゲーム及びボール運動.
- 文部科学省 (2008) 小学校指導要領解説 体育編.
- 文部科学省 (2008) 中学校指導要領解説 保健体育編.
- 文部科学省 (2009) 高等学校指導要領解説 保健体育編・体育編.
- 永島淳正 (1990) 学校選択と生徒選択. 体育科教育, 38-5 : 38-40.
- 佐藤靖 (2002) みんなが上達するためのドリルゲーム、タスクゲームーゴール型教材を例に一. 体育科教育, 49-15 : 20-23.
- 高橋健夫 (1999) これからの体育授業と教材研究のあり方. 体育科教育, 41-4 : 19-21.
- 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編 (2002) 体育科教育学入門. 大修館書店：東京.